

ジョヴァンニ・ソツリマ インタビュー

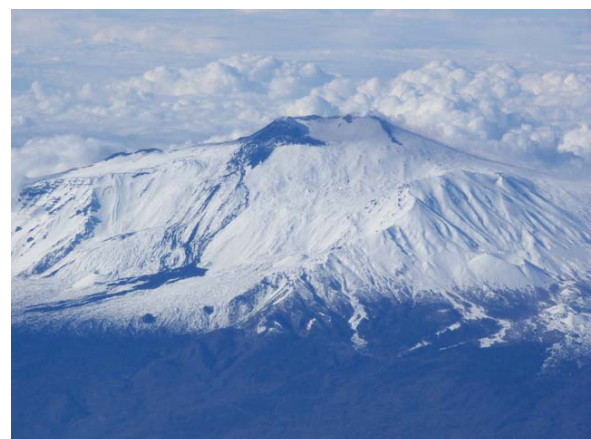
「Theory of the Earth」について

- Q1) 「Theory of the earth」のコンセプトはどんなものだったのでしょうか。
ソツリマさんの他の楽曲からも地球の鼓動や大自然の営みなどに強い関心を持っているように思えます。
- A1) 私のアイデアはクラシック音楽の型にはまらない協奏曲を書くことだったのです。自由な発想ができる音楽的スペースを作り上げることにフォーカスしていました。仰る通り、私は「自然」をととても敏感に感じて、常にそのことを考えています。Theory of the Earth を書いた時もそうでした。私の関心は自然についての頭の中の塾考だけにとらわれず、自然と人間の相互的な営みにあります。良いことも(残念ながら)良くないことに関しても、ですね。この大きなテーマは、最近では『アイスチェロ協奏曲』などの私の他の作品にも共通しています。
-
- Q2) 「Theory of the earth」の作曲にあたって最初のインスピレーションを得たのは富士山(Mt.Fuji)の写真だったということですが、どういう印象をもちましたか。
- A2) 時間が経ってしまっているので、詳細を思い出すことは難しいのですが、たくさんの写真、ポストカード、絵画を見たことを覚えています。作者などは覚えていないのですが。実際に富士山を見たこともないのに、とても力強いものを感じたのを想えています。いつか訪れてみたいですね。夢で想像する描写です。
-
- Q3) 富士山と並び、シチリア島にあるエトナ山(Monte Etna)も「Theory of the earth」の作曲に大きなインスピレーションを与えています。この山のことも教えてくださいませんか？
- A3) その通り。エトナ山はととてもよく知っています。富士山より少し低く、しかし、大分違っていると思います。エトナ山はそれ自体が他と隔離した一つの宇宙のようで、常に火山として活動しており、シチリアでは母のような、良き母のような存在です。中世やバロック時代の小さな街の多くは溶岩と木でできていたのです。今でもこの山を守ろうという人たちがいて、そこに住む楽器職人や職人、アーティストを知っています。この山の歴史には様々な伝説があり、多くのギリシャ神話をはじめ様々なことがエトナ山とつながっています。山頂からは、海とイタリア本島のカラブリア州(ブーツのつま先)が見えます。とても存在感がある場所です。山で作られるワインは格別ですよ。かつて活動していないいくつかの火口で演奏したことがありますが、響きは完璧でした。エトナ山には静寂、神秘、神聖さが存在します。



富士山

Photo Toshinobu Takeuchi



エトナ山(イタリア)

- Q4) 三味線について 三味線という楽器との出会いについて教えてください。
実際に楽器を目にして、生の音を聴いたときの印象はどのようなものだったでしょうか。
楽器の存在がコンチェルトを書くにあたって、なにかインスピレーションをもたらすことができましたか。
- Q4) 三味線は間接的には知っていました。少し音源を聴いてみて、伝統を尊重しつつ、かつ自由な発想で音楽を作っていました。簡単ではなかったのですが、三味線という楽器の「歌」「詠唱」を見つけようとしていました。そしてそれを想像しながら書きました。
-
- Q5) 西潟昭子さんと最初に会ったときの印象を教えてください。
- A5) 素晴らしい方でした。とても深い感性を持った方でした。
-
- Q6) 三味線のパートを書くにあたり、難しかった点などはあったでしょうか。
- A6) 実は自然にやれました。そこまで多く試すつもりはなく、楽器の特性をイメージし楽器の特性を生かした音を作るということにフォーカスしたのです。
-
- Q7) 作品には特別な旋法(mode)やリズムなどが使われていることはあるでしょうか。
また音律(Temperament)についても教えてください。
- A7) この協奏曲はオーケストラとの対話であり、最後の楽章にチェロのソロがあります。しかし、リズムというより、色彩や強弱にフォーカスして作ったのです。ピッチについてはそこまで問題はありませんでした。バロックのチェロやヴィオラ・ダ・ガンバといった楽器も弾きますから、ピッチが常に変化することには慣れてます。
-
- Q8) 「Theory of the earth」で描かれるのは、東洋と西洋の融合でしょうか、
それとも向き合うことによる個性の違いでしょうか。たとえば作曲家の武満徹(Toru Takemitsu)がオーケストラと日本の楽器(尺八、琵琶)が共演する「November Steps」という作品を書いたとき、融合ではなく対峙(Confrontation)することで個性の違いを理解することを目標にしたと言っています。
「Theory of the earth」はどのようなお考えに基づいているでしょうか。
- A8) これはどうやって答えればいいのか…。シチリアもある意味では東と西との架け橋だし、そのことはモニュメントや岩石、言語に残されています。当時は詳細にはわかりませんでした。幼少期から自然にこのことを見聞きしていたのです。融合させる要素の違いを深く知る興味はそこまでないのですが、崇高で表現豊かな融合というものは存在するのではないのでしょうか。武満徹の音楽は大好きです。
-
- Q9) 4つの楽章には特にタイトルやキーワードのようなものが付されていません。それぞれの楽章のイメージを教えてくださいませんか？
インスピレーション、イメージや神話性など。タイトルをつけなかった理由はありますか？
- A9) 楽章については、イメージをはっきりさせない方が好きです。協奏曲の楽章という形にとどめて、聴く人が自然に自分自身に生まれるイメージと関連付けてもらえるのが一番です。周期的なモチーフがあり、その中で聴く人それぞれが何かを感じてもらえたらと思います。明確なイメージはあまり持ちたくないのです。その都度変わっていくし。
-
- Q10) この協奏曲でのチェロの役割はなんですか。ダブルコンチェルトですね。
- A10) 別人格のように離れていて違う声を持つ二つの楽器の「ダブルコンチェルト」というより、「デュエット」のようなイメージですね。最後の楽章の前のチェロのカデンツァをよく覚えています。2008年にこの楽章を書き直して、『フォークテイルズ』という私のチェロ協奏曲の第三楽章に使いました。ゆったりとした楽章です。Theory of the Earth もゆったりとして、透明感があるエンディングです。